

同志社大学

2011年度 卒業論文

論題： 大学生の就職活動時における地元志向  
——都市部にある大学に通う学生を事例に

社会学部社会学科

学籍番号：19081034

氏名：小林 里佳

指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：26087字)

ID:19081034

小林 里佳            大学生の就職活動時における地元志向 ——都市部にある大学に通う  
学生を事例に

〔キーワード〕 地元志向 就職 大学所在地

就職氷河期といわれ、就職活動の早期化・長期化について多くの議論もなされている。これまでの研究で、最近の若者の地元志向の強まりや、地元就職にこだわる人の類型、地元就職志向であることが就職活動にネガティブな態度を引き起こすなどが明らかになってきた。しかし先行研究の多くは地方にある大学に通う学生を対象になされてきた。そこで本研究では近畿圏内出身者・近畿圏外出身者が混在する都市部にある大学に通う学生を調査対象にする。地元を就職地として選ぶとき、何が要因で地元就職志向になるのか。またこれまで地方大学の学生において明らかにされてきたことが、本調査でも同様に起こるかについて明らかにする。

インタビューによる調査の結果、地元就職を選択する若者は、大学の所在地が都市部であっても地方であっても地元就職希望者は存在論的・経済論的戦略が同様に働くことがわかった。さらに、学生は企業を選ぶとき〈場所〉よりも〈マッチング〉を重視することが明らかになった。

## 目次

はじめに.....	1
1 先行研究.....	1
1.1 地元志向の若者像の四類型について.....	1
1.2 地元志向と〈就活力〉について.....	5
1.3 大学生の企業選好と価値観について.....	6
1.4 これまでの先行研究がおこなわれた時代背景・就職活動状況.....	7
1.5 先行研究における問題点.....	7
2 研究方法.....	8
2.1 調査目的.....	8
2.2 調査対象.....	9
2.3 調査方法.....	9
2.4 2012年卒業予定者の置かれている状況.....	10
3 調査結果および分析.....	11
3.1 現代の大学生における地元志向現状.....	11
3.2 企業選好時の価値観.....	14
3.3 存在論的戦略メリットを重視した地元志向.....	16
3.4 経済的戦略メリットを重視した地元志向.....	20
3.5 地元就職志向と〈就活力〉.....	21
4 考察.....	22
4.1 マッチングについて.....	22
4.2 経済的・存在論的戦略.....	23
4.3 就活力.....	24
4.4 総括.....	24
おわりに.....	24

注釈

参考文献

## はじめに

新卒内定率や離職率、フリーター・ニートなど〈若者の雇用〉についての問題は近年注目を集めている。特にここ数年〈就職氷河期〉という言葉が使われるようになり、学生の就職活動が早期化・長期化する一方、学業への影響や就職解禁日や就職活動開始時期を遅らせるという対応など、様々な動きがある。地方圏と都市圏での就職の可能性について、大きな格差があることは明らかであり、地元就職にこだわることは、就業上の選択肢を狭めることにもなりかねない。

しかし最近の若者は地元志向が強くなっていること、さらには地元志向が強いことは、就職活動へのネガティブな態度・意識や〈就活力の弱さ〉につながることを指摘している論文が多く存在する。これらの地元志向・就職意識に関する多くの調査・研究は、地方圏にある大学に通う学生を対象としてきた場合が多い。

そこで本稿では、近畿圏内出身者と近畿圏外出身者が混在する都市部にある大学を調査対象として、インタビューによる質的調査を行い、現代の大学生が就職活動時においても地元志向が本当に強い傾向にあるのか確かめ、その理由を探りたい。また先行研究が明らかにしてきたことが、同じようにいえるのか調査したいと思う。

実際に筆者自身も近畿圏外出身であり、2012年卒業予定者としての就職活動を通して様々な経験をした。

1章ではこれまでに明らかにされてきた地元就職志向の若者像を捉え、大学生の企業選択時に重要視する要因、さらには地元就職志向と就職活動における意識や行動力の関連についてみていく。さらにこれまでの研究を通して問題提起を行い、3章では実際のインタビュー調査結果を示しながら、現代の大学生における就職活動や地元志向の実態を各視点から分析し、最終的な結論へと導く。

## 1 先行研究

そもそも地元志向とはなにか。その定義について言葉を分けて解釈しようと思う。まず地元意識とは、社会学小辞典(2005)によれば、一定地域の住民が、風土や伝統的慣習への愛着から、その地域と住民に抱いている帰属意識としている。郷土愛として昇華することがあるが、反面、他地域に対する排他性を伴いがちであるとされている。また住民意識とは一定の地域での住民の帰属意識、共同性の観念、地域の諸条件にもとづく特殊な意識形態や共通の観念としている。

次に志向についてだが、社会学小辞典(2005)によると、意識の本質的特性のことである。また大辞林(1995)によると志向とは、意識がいつもある対象に向かっていることである。これらを踏まえ、以下本稿の枠組みとなるものを見ていく。

### 1.1 地元志向の若者像の四類型について

響田竜蔵(2009)は「地方の若者」の当事者のリアリティを分析するなかで、「地元就職」の困難な部分に目を向け、そのうえで「地元志向」をどう評価するかについて考察をしている。

調査対象者は20代の地方私立大学(X大学)出身の地方圏在住者26名(男性20名、女性6名)である。彼らの出身大学であるX大学は、中国地方の中山間地にある社会学系、福祉系、保健科学系、スポーツ科等の学科を備えた総合大学である。出身者26名に対し、85項目の半構造化インタビューと、35項目の基礎的なアンケート調査を2008年7月から9月に行った。インタビューの内容は、当事者の生活に関わる8つのテーマとして出身大学、仕事、余暇とライフスタイル、家族、友人、家族・友人以外の人間関係、地域の現状、日本社会を設定し、それらに対する評価を自由回答で尋ねるというものであった。

まず、地元志向と判断するための指標として、インフォーマントに対し「あなたは地元が好きですか」(実際には地元外在住のもの9名には「地元と現在住んでいる地域を比較して、どちらのほうが好きですか」、「将来的に地元に戻って就職する予定はありますか」)また「就職活動時、地元就職にこだわりましたか」「今の地域(=地元)に住み続けたいですか」という質問をした。調査の結果は、いずれもインフォーマントの強い地元志向を裏付けるものであった。

なぜ〈地元志向〉が支持されるのか。この先行研究では地元志向に関する多様な語りのタイプを分析するうえで、以下二つの視角を用意した。

第一に、地元志向を当事者の戦略として捉え、それを経済的な意味でのメリットとして捉えるのか、存在論的な意味でのメリットとして捉えるのかという視角である。つまり、地元志向の理由に関しては、一方で就業選択上のリスク回避、実家からのサポートを得られること、地方圏の場合は安価な生活環境を享受できること等の経済的合理性の面から解釈する見方がある。他方では、地元のサブカルチャー集団への帰属、家族や友人、恋人といった居心地のよい人間関係といった、地域社会のなかのさまざまな社会関係のなかで承認を得られること、すなわち存在論的な〈社会的包摂〉の感覚を得られるというメリットがあるという見方もある。

第二に、地元志向という選択が、それ自体が当事者の社会的包摂につながる積極的な〈目的〉であると考えられる場合と、そうでなくて、当事者が社会的に排除された状況に対する消極的な対応の〈結果〉として考えられる場合とに分けてみる視角である。

経済的戦略・存在論的戦略を二つの軸として組み合わせると、4つのヴァリエーションの地元志向の若者像の類型が浮かび上がる。まず経済的ポジティブ・存在論的ポジティブに現れるのは、安定志向の若者類型である。この類型の若者は、経済的安定を第一とし、なおかつ地域社会のなかで相対的に評価の高い企業・職種についている。都会に行って常に不安に煽られてばかりの競争社会に巻き込まれることを避け、家族や地元の友人たちとの付き合いを大切に、地域社会に根を張って堅実に生きるというライフスタイルがこの若者にとって理想である。

つぎに経済的ポジティブ・存在論的ネガティブに現れるのは、安価な生活による包摂の若者類型である。これは、必ずしも安定的な職業には就けていなくても、地方の安価な消費生活環境によって包摂されている若者である。高度情報化と大量消費社会の進展は、地方を〈お金がかからずにそこそこの生活ができる場〉にした。地元に住めば、実家からのサポートも得られるわけで、地元生活は経済的に合理性のある選択肢となる。地元生活の若者の堅実な生活感覚による選択である。

つぎに経済的ネガティブ・存在論的ポジティブに現れるのは、地元つながり型の若者類

型である。この種の若者が地元で固執するのは、自分の存在を認めてくれる地元にいる友人たちや家族とのつながりを大切にしたいからである。地元の居心地のよい人間関係のためであれば、自らのキャリア・アップを断念するというのもいとわないという意味で、それは経済的には非合理的な選択ともなりうる。

最後に経済論的ネガティブ・存在論的ネガティブに現れるのは、積極的に地元残留したというよりも、むしろ社会的排除の結果として、やむを得ず「とりあえず地元にいる」あるいは「地元に戻らざるをえない」という不遇な状況にある若者である。厳しい社会経済の状況を目の前にして、実家というセーフティネットに頼らざるをえないという状況である。自らの雇用不安定に加え、健康問題等の理由で、親世代の機能不全に危機が生じたとき、はじめて実家は自分の存在価値をかりうじて与えてくれる空間として積極的に意味づけられることである。

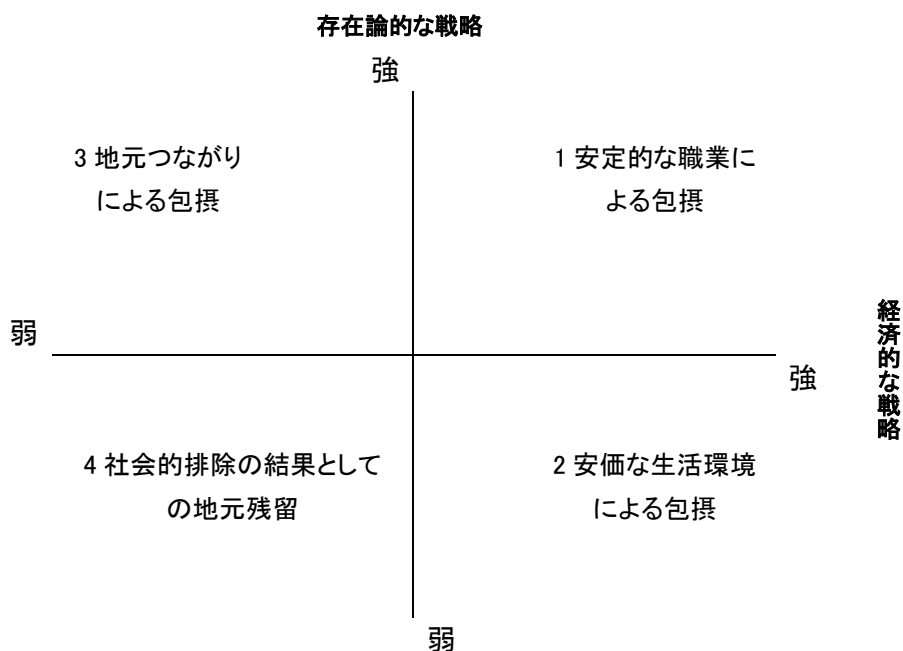


図1：地元志向の若者像の類型

出典：轡田竜蔵（2009）をもとに作成

以上の4つが、地元志向について典型的な説明モデルである。これをもとに先行研究での調査結果について、さらに説明する。

最近の若者はキャリア面での上昇志向は少なく、〈安定志向〉で〈堅実〉であるという議論は多い。さらに言えば、地元安定志向は、地方の周辺部に行けばいくほど長男意識、あるいは家父長制的なバイアスと深く結びついた男の宿命とでも言うべき性格がおびてくる。たしかに出生順序と地元志向に関する研究はいくつかあり、富江英俊（1997）によれば、出生順位が地元志向を規定するとしている。また佐藤隆三（2005）によれば、長男・長女であれば地元就職志向が強くなると述べている。これらの研究で出生順位が地元志向を規定する理由について、長男・長女である彼らがいずれ地元に戻ることが求められるとい

う親からの期待と本人もその意識が強いこと、また長男・長女が自分の家や土地を守り、親を扶養するという伝統意識の強さから起因するものであると説明している。

また女性の場合、地元志向よりも結婚による移動志向のほうが強いことを示すケースがほとんどであった。実際調査による事例で、ある女性は親が地元に近いところでの結婚を望んでいたという理由で、就職を機に地元に戻り、仕事をしながら、休日には小中学校の同期の友人と交流し、地元のテニスクラブに属すなど、すっかり地元で根差しアクティブに振舞っている。しかし「もし地元外の恋人がついてこいというなら寿退社してついていく」と言う。このように、女性の場合においては、地元志向よりも結婚による移動志向が強いことを示すという傾向があるようだ。

次に、〈安価な生活環境による包摂〉についてだが、調査結果からは、都会生活にくらべて、現在住んでいる地域の生活環境の利便性が高いことを強調する傾向がはっきり見られた。「大都市の生活をうらやましいと思いますか」という質問について、「うらやましくない」と回答したものが圧倒的に多数であった。「県内の生活に不満があるか」という質問については、半数ほどが「ある」と回答し、その多くが「買い物、遊びに行くところがない」という意見であったが、大半が日常的に都会的に洗練された消費生活への欲求や刺激を求めているインフォーマントはほとんどいなかった。大半が地方の消費生活環境にそれほど強い不満を示さなかった。

また〈地元志向〉の核心部分に、友人や家族とのつながりが果たす役割の大きさが明確に示された。近年の若者論のいくつかは、サブカルチャーを媒体としてつながる仲間集団との対面的なつきあいから離れがたいという状況が就業選択に影響を及ぼし、結果としてその社会的排除を帰結してしまうという事態に着目している（新谷 2006）。とりわけ、就業チャンスが限定される地方圏の周辺においては、これまでの人間関係を維持するために〈地元就職〉にこだわることは、失業のリスクを冒すことにほかならない（李・石黒 2008）。調査結果からも、そのようなメカニズムについて考えさせられる事例はいくらかあった。

また地元の友人関係を基礎にした関係性を、地域の公共空間に広げていくことによって若者をエンパワーメントする可能性はないか、についても調査している。「地域活動に興味があるか」という質問において、何らかの関心を示すものもいた。しかし地元生活における友人関係の重要性については述べるが、地域社会とのかかわりについては強く拒絶する者、自分たちとは距離のある存在として捉えている若者もいくらかいる。

最後に〈社会的排除の結果としての地元残留〉についてだが、これは〈実家の役割〉と〈仕事のやりがい放棄〉という視点から説明している。まず、実家の役割についてだが、これは地元を出られないやむをえざる事情を消極的に語る一方で、家族との相互扶助的な関係のなかで役割を与えられることにより、ぎりぎりのところで生活とプライドを維持しているという事例や、自らの雇用不安定に加え、健康問題等の理由で親世代の機能不全に危機が生じたとき、はじめて実家は自分の存在価値をかるうじて与えてくれる空間として積極的に意味づけられるという事例から説明している。またやりがい志向のインフォーマントが〈やりがい〉にこだわって地元を出て働くが、結局その労働環境の悪さや先の見えない将来展望からやりがい放棄して地元に戻るといった例である。このように、社会的排除に対応するささやかな防波堤としての意味での〈地元〉というタイプだ。

## 1.2 地元志向と〈就活力〉について

平尾元彦・重松政徳（2006）は大学生の地元志向が、その就業意識に及ぼす影響について注目して分析・研究した。地元志向の学生とそうでない学生との就業意識の違いを探ることを通じて、地域政策としての若者支援に求められる視点について提示している。

平尾・重松（2006）は、地方圏の国立大学である山口大学の学生 409 人に対し、3 年生の 7 月（2005）時点（就職活動準備段階）での調査を行った。その結果、地元志向によって「地域（狭）」「地域（広）」「広域」と 3 つのグループに分けた。「地域（狭）」は実家から通えるところ・地元（出身県）での就職希望、「地域（広）」は出身県でなくとも近隣県での就職希望、「広域」は東京での勤務希望・勤務地にこだわりのないという意味で分類されている。この「地域（狭）」と「地域（広）」をあわせて地元志向とすると、約 70% が就職先として地元就職を意識していることとなる。すなわち、地元志向の弱い（無い）学生は、地域にこだわらず就職を考える、あるいは東京など大都市圏を考えるのに対して、地元志向の強い学生は狭いエリアで考えざるを得ないということになる。

また、女子学生の地元志向が強いという結果も出て、一般にいわれる通りの結果になったが、男子学生においても広域志向が全体の 3 分の 1 程度だったことから、男子学生の地元志向も強いことがわかり、もはや地元志向は女子学生特有のものとの考えは実態を反映していないことがわかった。

就職意識を測るため、この論文では 2 つの項目を設けた。まず、地元志向と将来の仕事について質問したところ、「将来やりたい仕事がある」に肯定的回答を示したのは、地元志向学生が約 60% だったのに対し、広域志向学生は 70% と 10 ポイントも差があった。このことから、やりたい仕事が見つからないというのは就職を前にした若者にとっての壁であり、地元志向の強い学生のほうが、壁に直面する割合が高いとした。また地元志向と公務員志向（地域限定的な仕事とみる面）が広域志向学生よりも強く結びついていることも明らかになった。

つぎに地元志向と働く意識についてだが、「就職活動に意欲的」と思っているのは、広域志向学生により強く表れていて、自己評価ではあるが、地元志向学生は就職活動スタートに遅れていると感じているものが多かった。また「仕事をする自分がイメージできない」「できれば働きたくない」「フリーターもやむをえない」「就職活動は不安である」など、どの質問においても地元志向学生のほうがマイナスな評価・不安感を持っており、ここでも意識の差は歴然と存在することがわかった。このような就職活動に対する意識及び行動を“就活力”と称し、地元志向の学生は総じて就活力が弱いとした。

## 1.3 大学生の企業選好と価値観について

加藤里美（2010）によれば、大学生の企業選択要因は、「場所」「規模」「金銭的要因」「福利厚生」の順に重要と捉えていることがわかった。これは、大学生の就職時における企業選好に個人の価値観がどのように関連しているか、コンジョイント分析を用いて、探索的研究を行い、大学生の企業選択のあり方を明らかにしたものである。

岡本眞一（1999）によれば、コンジョイント分析とは、ある製品の構成要素（性能・機能・色・形・価格等）の相対的重要度を個人単位で求め、市場が望む製品の開発や新製品の購買層を知るために使われる調査・分析方法である。コンジョイント分析では、製品に



対する消費者の評価から、製品を構成する多くの要素がそれぞれ、消費者の意思決定にどれくらい影響を与えたか、推定することが出来る。これを用いて、大学生が、就職活動の際、企業選択に、個人の価値観がどのように関連したのかを調べる。

この調査はインターネットによる調査と、名古屋市にある国立大学での調査を併用している。インターネットによる調査は、2008年8月下旬に行われた。被験者400名で、大学の属性(国立大学・私立大学)、また被験者の出身地(北海道から鹿児島まで)など様々で、特定のグループに極端な偏りが出ないようにしている。また2008年10月上旬に名古屋市における国立大学2校の102名に対する調査も行われた。その結果、次のようなことがわかった。

まず調査年である2008年当時において、大学生の企業選好には、「場所」「規模」「金銭的要因」「福利厚生」の順に、各要素を重要視していることがわかり、場所は「地元」、規模は「大企業」、金銭的要因は「年功要素が強い」、福利厚生は「充実している」が優位であることがわかった。

次に大学生の属性(大学、性別、所属)と企業選好の関連をみしてみる。まず、「場所」「規模」「金銭的要因」「福利厚生」は、国立大学と私立大学では、大きな差がないことは明らかであった。ただ、国公立の被験者の方がより「金銭的要因(年功要素が強い)」を重要視していることがわかった。性別と所属学部による違いによる関連も、似た傾向にあることがわかった。しかしインターネット調査による被験者だけを見ると、女性は「場所(地元)」を重視しており、男性に比べて「金銭的要因(年功要素が強い)」や「福利厚生(充実している)」を重視していないという結果が出た。一方で、名古屋市にある国立大学の女性を含むと男女大きな差がないという結果になったため、これは名古屋市の国立大の女性被験者の影響が大きいのかかもしれない。以上のことから、大学(国立・私立)、性別(男・女)、所属学部(文系・理系)の属性ごとに水準がないことがわかり、似たような傾向を示すことが明らかとなった。

ただし加藤(2010)によれば、今回のインターネット調査は、2008年秋のサブプライム危機に端を発した世界同時不況の前に行われたため、楽観的な経済状況の下での判断となっている。一方名古屋市にある国立大学の就職の決まった4年生以外は、サブプライム危機後の、多少悲観的な状況下での調査であった。大学生の企業選好には、このような経済状況が反映されていると考えられる。したがって、大学生の全員が悲観的な経済状況、就職氷河期と言われる状況の中にあれば、地元志向よりも大企業志向や年功要素が重要視されることが予想され、今回とは異なる結果が生じるかもしれないと述べられている。この調査以降、つまり、現在がまさに全員が悲観的な経済状況であり、就職氷河期であるとされ、経済状況が個人の価値観に与えた影響は大きいと考える。

#### 1.4 これまでの先行研究が行われた時代背景・就職活動状況

これら3つの先行研究のなかで、実際に調査を行った年は、2005年と2008年である。まず当時の日本の経済状況と大学生の内定率を確認したい。

##### (1) 月例経済報告にみる日本の景気推移

まず2005年であるが、内閣府発表の月例経済報告<sup>1)</sup>の10月分によれば「景気は、緩や

かに回復している。企業収益は改善し、設備投資は増加している。個人消費は、緩やかに増加している。雇用情勢は、厳しさが残るものの、改善に広がりが見られる。先行きについては、企業部門の好調さが家計部門へ波及しており、国内民間需要に支えられた景気回復が続くと見込まれる。一方、原油価格の動向が内外経済に与える影響等には留意する必要がある。」(内閣府 2005)と言われている。この当時はやや上向きだということがわかる。

また 2008 年 10 月分においては「景気は、弱まっている。当面、世界経済が減速するなかで、下向きの動きが続くとみられる。加えて、アメリカ・欧州における金融危機の深刻化や景気の一層の下振れ懸念、株式・為替市場の大幅な変動などから、景気の状態がさらに厳しいものとなるリスクが存在することに留意する必要がある。」(内閣府 2008: 1)と言われている。また特に雇用情勢に関しては「新規求人数は減少している。有効求人倍率<sup>2)</sup>は低下している。雇用者数は横ばいで推移している。賃金の動きをみると、定期給与は横ばい圏内で推移している。」(内閣府 2008: 4-5)とされる。

## (2) 平成 17 年 (2005) 度および平成 20 年 (2008) 度大学等卒業予定者の就職内定状況調査

文部科学省と厚生労働省の発表によるとまず平成 17 年 (2005) 度の大学等卒業予定者就職内定率は 65.8%で、前年同期を 4.5 ポイント上回る。男女別にみると、男子は 68.1% (前年同期を 5.2 ポイント上回る)、女子は 62.9% (前年同期を 3.7 ポイント上回る)。私立大学の内定率 65.6%、男子 67.7%、女子 63.1%だった。

次に平成 20 年 (2008) 度の場合は、大学の就職内定率は 69.9%で、前年同期を 0.7 ポイント上回る。男女別にみると、男子は 69.8% (前年同期を 0.3 ポイント下回る)、女子は 70.1% (前年同期を 1.9 ポイント上回る) という結果だった。私立大学の内定率は 69.0%、男子 68.9%、女子 69.0%だった。

また株式会社リクルートの研究機関であるワークス研究所による、ワークス大卒求人倍率調査 (2008) によると、平成 17 年度から 20 年度までの推移を見てみると、大卒就職率は上昇する一方で、大卒求人倍率<sup>3)</sup>も 1.37 倍から 2.14 倍に増加している。ただしこれは 2008 年 4 月の調査結果である。このように、大学生就職内定率の面からみると当時の大学生の就職状況はさほど悪くなかったものの、日本経済の面からみると景気は徐々に下降していたことが、明らかである。

### 1.5 先行研究における問題点

これらの先行研究に共通して言えることがある。それはどれも調査自体は 2008 年以前に行っているということだ。それまでの日本は株式市場こそ活況を呈していたが、实体经济としては新興国やアメリカの好景気の恩恵をそれなりに享受していた。しかし 2007 年 8 月頃よりサブプライム問題が顕在化し、関連会社のなかには破綻するものが出始め、世界金融危機に見舞われた。さらに 2008 年 9 月のリーマン・ショックで世界同時不況へと陥り、日本もその影響を受け不況となった。

この 2008 年を境に日本の景気をはじめ、雇用情勢も次第に変わっていった。また 2011 年には東日本大震災も起こり、それに伴う景気の弱まりやリーマン・ショック以降も景気持ち直しの足踏みが続く状況のなかに私たちはいる。よって、この時代に「大学生の就職

活動」について調査をすれば、きっと時代の影響を受けた結果が出るとだろうと予測した。

またこれらの先行研究と今回の調査で異なる点はもう一つある。それは調査対象者が通う大学の所在地である。轡田（2009）や重松・平尾（2006）の調査はともに地方圏にある大学に通う・または通っていたOBやOGを対象に調査している。これらの地方にある大学に通う学生の多くは、その大学の近郊エリア出身者が多いなどの偏りが見られる。それらの大学とは違い、調査対象である本学に通う学生は近畿圏内出身進学者が多いものの、近畿圏外から進学してくるものも多い。なおかつ彼らの出身地は全国各地からさまざまである。この特色を生かし、調査し、大学所在地が都市部にあるか地方にあるかの違いによって、就職地選択に影響があるのか。もし影響があるならばどのように影響をするのか捉えていきたいと思う。

## 2 研究方法

### 2.1 調査目的

本研究では、大学の所在地が地方にあるのか、都市部にあるのかによって、大学生の地元就職志向に影響が及ぼされるのかを明らかにする。先行研究では、その多くの調査が地方にある大学に通う学生を対象に行っていた。よって本稿では近畿圏内出身者と近畿圏外出身者が混在する都市部にある大学における調査をすることにした。近畿圏外出身者も出身地は全国様々である。

そこで筆者はまず、そもそも都市部の大学に通う現代の大学生にも地元志向が強く見られるのか否か知る必要がある。加藤（2010）によれば、大学生の企業選好の要因は「場所」「規模」「金銭的要因」「福利厚生」の順に重要とされており、勤務場所が地元で大規模である企業を好むという傾向があるとしている。しかし加藤（2010）が明らかにした大学生の企業選好における価値観が当時と変化したことも十分考えられた。なぜならその調査自体は2008年リーマン・ショック以前に行われており、その経済的影響は現在も続いており、就職活動を行う学生にも影響があったと考えられる。現代の大学生は自分の価値観で何を重要視して企業を選ぶのだろうか。また平尾・重松（2006）によれば、就職において地元志向の強い地方大学の学生は、いわゆる〈就活力〉が弱いと言われていたが、実際に地元就職志向の学生たちは就職活動に対しネガティブであるのか明らかにしたい。

これらの先行研究と現代においては、経済状況や就職内定率・求人倍率の変化による影響も十分考えられた。例えば、轡田（2009）が示した地方で暮らす地元志向の若者のヴァリエーションにおいて、経済的戦略は、地元においても親からの経済的援助を受けられなくなる、地元での求人数減少など、その戦略がもう既に機能しなくなったのではないかと考えることが出来る。

そこで筆者は本稿において、近畿圏内出身者と近畿圏外出身者が混在する都市部にある大学に通う女子大学生が、就職活動を行う時、経済的・存在論的戦略の強弱が、就職地域の選択に影響するか否か。また影響する場合、どのように影響するのかを明らかにしたいと思う。

## 2.2 調査対象

今回の調査にあたって、地元の定義を確認したい。今回対象者には、出生地または自分が幼少時代など長く過ごした土地を〈地元〉としてもらった。調査の対象は、近畿圏内出身者と近畿圏外出身者が混在する都市部にある大学、つまり「同志社大学」に通う4回生の女子学生である。彼女たちはみな2012年度卒業予定者を対象とした就職活動を経験してきた者たちだ。また、近畿圏内出身者と近畿圏外出身者が極端な偏りにならないように、対象者16名を集めた。

また女子学生のみを対象としたのは、調査対象として集まりやすかったことと、結婚後の勤務継続についても聞きたかったからである。女子学生の方が、男子学生に比べ、結婚後の勤務形態についての選択肢の広さを持っている。以下、対象者の簡単な紹介をしておく。

表1：対象者リスト

対象者	出身地	居住地	内定先	勤務予定地	インタ ビュー 時間	
近 畿 圏 内 出 身 者	Aさん	千葉県	京都府長岡京市	メガバンク・総合職	未定（全国の都市圏）	35分
	Cさん	大阪府	大阪府交野市	教育塾・総合職	関西	33分
	Dさん	京都府	京都府上京区	不動産会社・総合職	関西	42分
	Fさん	大阪府	大阪府東大阪市	金融・地域型総合職	大阪府東大阪市	35分
	Gさん	大阪府	大阪府河内長野市	芸能事務所・総合職	東京	40分
	Hさん	大阪府	大阪府泉大津市	メーカー・総合職	静岡県	42分
	Kさん	兵庫県宝塚市	京都府下京区	メガバンク・一般職	関西	30分
	Nさん	兵庫県	兵庫県西宮市	人材紹介会社・総合職	未定（全国の都市圏）	39分
	Pさん	滋賀県	滋賀県栗東市	コンサルタント会社・総合職	未定（東名阪）	32分
近 畿 圏 外 出 身 者	Bさん	香川県三豊市	京都府中京区	民間企業は未定、もしくは学 校講師	未定、講師の場合は 香川	40分
	Eさん	静岡県袋井市	京都府下京区	損害保険会社・地域型総合職	静岡県浜松市	38分
	Iさん	東京都大田区	京都府京田辺市	IT機器販売・総合職	神奈川県	39分
	Jさん	岐阜県美濃市	京都府京田辺市	電機メーカー・SE	東京都	37分
	Lさん	鳥取県東伯郡	京都府上京区	自治体向けシステム・SE	大阪	49分
	Mさん	高知県高知市	京都府中京区	人材派遣会社・総合職	大阪	32分
	Oさん	高知県高知市	京都府伏見区	地方銀行・一般職	高知県高知市	35分

## 2.3 調査方法

本研究は面接法による聞き取り調査を実施した。なお調査にあたって、ICレコーダー・メモノート・ペンを使用した。次章では、筆者が2011年11月から12月にかけて、実施した調査した内容をもとに記述する。

## 2.4 2012年卒業予定者の置かれている状況

では調査対象者である2012年卒業予定者の置かれていた状況を、日本経済の面と大学生の就職内定率という面から見てみたいと思う。

### (1) 月例経済報告にみる日本の現在の景気

2011年の日本の経済状況について、内閣府発表の月例経済報告の2011年10月分によると、「景気は、東日本大震災の影響により依然として厳しい状況にあるなかで、引き続き持ち直しているものの、そのテンポは緩やかになっている。企業収益は、減少している。雇用情勢は、持ち直しの動きもみられるものの、東日本大震災の影響もあり依然として厳しい。先行きについては、サプライチェーンの立て直しや各種の政策効果などを背景に、景気の持ち直し傾向が続くことが期待される。ただし、電力供給の制約や原子力災害の影響に加え、回復力の弱まっている海外景気が下振れた場合や為替レート・株価の変動等によっては、景気が下振れするリスクが存在する。またデフレの影響や、雇用情勢の悪化懸念が依然残っていることにも注意が必要である。」(内閣府 2011: 1)とされている。特に雇用情勢については「持ち直しの動きもみられるものの、東日本大震災の影響もあり依然として厳しい。新規求人数が増加していることなどから有効求人倍率は6月から上昇している。雇用者数は減少している。賃金をみると、定期給与はこのところ横ばい圏内で推移しているものの、ボーナスを含む特別給与の減少などから、現金給与総額は弱い動きとなっている。」(内閣府 2011: 5)と報告されている。以上から、やはり東日本大震災の影響を受け、様々な面で景気が停滞と雇用への影響があることが伺える。

### (2) 平成23年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査

次に文部科学省と厚生労働省の発表による平成23年10月1日現在の大学等卒業予定者の就職内定状況を見てみよう。大学等の就職内定率は、大学(学部)は59.9パーセント(昨年同期比2.3ポイント増)、男女別では、男子大学生の就職内定率は61.7パーセント(昨年同期比2.2ポイント増)、女子は57.7パーセント(同2.4ポイント増)。さらに私立大学では、男子:59.5パーセント、女子:54.9パーセントとなっている。文系の就職内定率は59.7パーセント(昨年同期比2.3ポイント増)となっている。過去最低だった前年同期を上回ったものの、過去2番目の低さとなっている。文科省は「わずかに希望の光が差したが、依然に厳しい状況」としている。全国の来春卒業予定者数(約55万人)に当てはめると、その4割である約17万人が内定を得られていない状況である。またワークス研究所(2011)の大卒求人倍率は1.23倍と、前年の1.28倍よりわずかに減少した。

### 3 調査結果および分析

#### 3.1 現代の大学生における地元志向現状

##### (1) 地元志向の実態

まず、就職活動という状況を抜きにして、地元への態度や愛着について聞いてみることにした。「あなたは地元が好きですか」「住み続けたいですか」という質問をすることにより、対象者の地元志向を調査した。その結果、16名全員が「地元が好きである」と答えた。その理由について聞いた結果が表2である。

表2：なぜ地元が好きか、その理由

理由	人数
土地柄	13
家族がいるから	5
友人がいるから	7
知人がいるから	2
方言	3
祭があるから	2

「土地柄」というのは、その土地にある独特の景色や雰囲気や体感する時間の流れ方、また自分が育った町という愛着や思い出の場所という意味も含まれる。圧倒的多数が、自分の地元に対する良さの認識を土地柄に置いていることがわかる。また家族・友人・知人など人とのつながりが、地元志向の理由になっているものもいた。人間関係に要因があることは轡田（2010）が言う存在論的戦略で、やはり同じように地元志向の核には「人とのつながり」の影響が大きいことがわかった。特に、地元の間人間関係の中でも「家族」についての語りはとても多かった。最後に「祭り」についてだが、これは大阪府泉大津市出身のGさん、高知県高知市出身のOさんが挙げていた。Gさんの地元では“だんじり祭り”があり、Oさんの地元では“よさこい祭り”が開催される。実際、Oさんは大学時代にもよさこいサークルに属し、毎年夏に高知で開催されるよさこい祭りに参加していた。中国地方で調査を行った轡田竜蔵（2010）によれば、「地域活動に興味があるか」という質問において、何らかの関心を示す者はいるが、実際に地域社会とのかかわりについては強く拒絶する者、自分たちとは距離のある存在として捉えている若者もいるとされていた。しかし、一部ではあるが、地域活動への参加にも積極的な若者もいることがわかる。皆、なんらかの形で地元の間人間としてのアイデンティティを持っていることがわかった。しかし、「住み続けたいですか」という質問に対しては、答えが分かれた。表3はその結果を、近畿圏内・近畿圏外出身者に分けたものである。

表 3：地元に住み続けたいか

	近畿圏内出身者	近畿圏外出身者	計
はい	4	2	6
いいえ	5	5	10

まず、全体を見ると、地元から出たいと思っている人がやや多い傾向にあることがわかる。また出身者エリアごとにみると、近畿圏内出身者のほうが圧倒的に地元に住み続けたいと思っていることがわかる。この理由についてはさまざまだったが、それについては後で説明することにする。

また都会の生活を羨ましいかという点についても尋ねた。今回は都会を東京と限定して質問をした。結果が以下である。

表 4：都会を羨ましいと思うか

	近畿圏内出身	近畿圏外出身	計
思う	1	4	5
思わない	8	3	11

やはり近畿圏内出身者は圧倒的に都会への羨望はなく、近畿圏外出身者（主に地方圏出身者）による憧れが強いことがわかった。また近畿圏内出身者になぜ羨ましくないのかと理由を訊ねると、とてもネガティブなイメージや意見が多かった。主に都会の人が冷たい・怖い・表情がないといった雰囲気、人の多さ・込み合っているという交通などのマイナスイメージが多かった。また地元生活についての不満についても聞いてみた。

表 5：地元生活に不満があるか

	近畿圏内出身	近畿圏外出身	計
ある	7	5	12
ない	2	2	4

表 5 から、地元が近畿圏内であれ、近畿圏外であれ、地元生活に対してなんらかの不満を持っていることがわかった。特に交通についての意見が多く、終電の早さや電車の本数の少なさ不便さが挙げられた。また、治安の悪さや生活する上での不便さ（買い物など）、さらに近畿圏外出身者でいわゆる地方圏の者は〈選択肢の幅が狭さ〉について言及していた。具体的には、高校や大学など進学先の選択肢や、遊びの選択肢が狭いと言及していた。しかし不満があるのにも関わらず、近畿圏内出身者の多くは結局留まるということも分かった。富江英俊（1997）の研究によると都市イメージの違いによって、プラスイメージを持っていれば積極的に地元を脱出しようとし、マイナスイメージを持っていれば積極的に地元に残ろうとするということを明らかにした。これは今回の研究でも当てはまりそうである。

(2) 就職活動における地元志向実態

次に、就職活動時と状況を限定して、地元志向について調べため「就職活動時、地元就職にこだわりましたか。」という質問をした。ここで、平尾・重松(2006)による就職先(地域)の意向を分類するタイプを借りることにし、「地元就職にこだわった」という回答をした者を地域型、「勤務地にこだわらなかった」という者を広域型とすることにする。表6は地元就職にこだわったかどうかの結果、またこだわった理由についても聞いた結果が表7である。

表6：就職活動時、地元就職にこだわったか

	近畿圏内出身者	近畿圏外出身者	計
はい	5	2	7
いいえ	4	5	9

こだわらなかった人は全体で見ると、約56%で広域型のほうがやや多かった。この広域型を構成するのに、近畿圏内出身も近畿圏外出身も半分ずつくらい的人数でいることがわかる。このことから、広域型になる学生は必ずしも近畿圏外出身者が多いというわけではないことが分かった。

地元就職にこだわった人は全体の約43%で、地元型のほうはやや少ないことがわかる。さらに地域型の多くは近畿圏内出身者で、さらにその5人のうち4人は現在実家で家族と同居している。また近畿圏外出身で地元就職にこだわったということは、つまりUターン就職という意味である。この2人は地元就職のみを考えて就職活動をしたIさんとOさんで、それ以外にもEさん、Jさん、LさんはUターン就職のみに絞って就職活動はしていないが、地元就職もひとつの選択肢として、地元企業の選考を受けていた。結局、Uターン就職することになったのは、Eさん、Iさん、Oさんの3人である。

表7：地元就職にこだわった理由

理由	人数
家族	6
エリアを出たくない	4
恋人	2
友人	1
実家に頼りたい	1

表7からは、地元就職にこだわった学生の多くが要因は人とのつながりを維持したいという意向がわかる。またその多くが家族であるということもわかる。また恋人についての語りもあった。これらについては詳しくは「3.3 存在論戦略による地元就職志向」で記述するが、家族という存在や影響の大きさを見ることができる。



### 3.2 企業選好時の価値観

「企業を選ぶとき、重要視したことはなんですか」と質問し、対象者には思いつくことを重要な順に自由に挙げてもらった。表8はその結果である。

表8：企業選択要因

要因	人数
マッチング	12
場所	8
内容	6
福利厚生	4
規模	3
給与	2

現代の大学生の企業選択要因は、「マッチング」「場所」「内容」「福利厚生」の順であることがわかる。加藤（2010）によると、名古屋の国立大学学生と北海道から鹿児島までの範囲で、全国各地の大学生にインターネット調査で、企業選択要因を聞いたとき、「場所」「規模」「金銭的要因」「福利厚生」の順に重要度は高かった。しかしこのインターネット調査は、2008年秋のサブプライム危機から発端した世界同時不況の前に行われた調査であり、今回の調査時は、この2008年以降の不況の最中であるため、結果が変わってくるのではないかと予測していた。結果として「場所」は2番目の重要要因になり、圧倒的多くの学生が口にしたのは「マッチング」についてだった。また「自分の目指す姿に近づけるか」「卓球をし続けることが出来るか」など、より具体的な要因もあった。

#### (1) マッチングについて

このマッチングとは、インタビュー内で出てくる意味としては「自分と同じような考えを持っているか」「企業の社風や理念と自分が一致するか」「職場・社員の雰囲気自分が馴染めるか」などである。対象者であるDさんはマッチングについてこう例えた。

業界を絞って受験しており、どうせやるなら自分が楽しめる仕事がしたいと思っていて。なおかつ、その場において自分がここやったら大丈夫と思えるところがいいと思っていて。“大丈夫”っていうのは、自分がそこへ入っていけるか馴染めるどうか。

たとえば大学に入ってサークルを選ぶとき、同じ内容をやっている団体はたくさんあって候補もたくさんあるけど、結局選ぶのは自分と雰囲気が合うかどうかという点で判断やる。それと同じ感覚で、不動産を扱う企業が多くあるなかで、自分と雰囲気が合うかとかを、人事の話し方（自分の企業について語る様子など）や実際に社員と話すことでなんとなくやけど、会社のカラーを見て、判断していた。

そこで自分が働いているのを想像できるかどうか、とよく就活では言われるが、そういう感じやった。

また、ほぼ自分と会社のマッチングのみで企業を選んだというMさんは、その理由についてこう語った。

社風・雰囲気・社員の人の魅力。それだけちゃうかな、っていう勢いで選んだ。仕事内容にはこだわりはなかった。事務とか、製造とか、そういう仕事は嫌やけど、業界っていう意味で、こだわりはなかったかな。

なぜこんなにマッチングにこだわったかというところ、好きな仕事・こんな仕事がいいという強い理想はなかったけど、その仕事が好きでも会社内の人間関係が悪かったら、たぶん仕事も会社も嫌いになるけど、仕事が嫌でも環境や人間関係が良ければ仕事も好きになれる、続けていけるんちゃうかな、と思った。

そうやって選んでいくことが、もともと自分の性に合うと思った。

このように、自分と企業とのマッチングをなによりも重視し、仕事を楽しく・長く続けたいと思っている学生は多いようである。

## (2) 場所について

また今回の調査で重要度が2番目に高かった「場所」についてだが、これは必ずしも場所＝地元ではない。近畿圏内出身はもちろんのこと近畿圏外出身者も“関西だから”という理由で場所にこだわる人もいた。たとえば、鳥取県出身のLさんは、就職活動は地元就職の可能性も含めて、広域型として行っていた。しかし、就職活動で東京へ行った際、東京への就職はしたくないと強く思ったそうだ。

昔、高校生くらいの時は都会・東京の生活に憧れていたんだけど、就職活動で東京へ何度か行って、嫌になった。危険な目に遭った時などに、助けてくれなかったという経験があるから。すごくたくさん人の中で、自分の変な人に絡まれて、誰も助けてくれなかったことがあって。東京の何がこわいかって、明らかに目の前で困っている人がいても、あんなにたくさん人があるのに、みんなに見ないフリをされ、我関係なしでスタスタ歩いて行っていたこと。京都駅で同じ目にあったらきっと周りは助けてくれると思う。

あと鳥取（地元）の人もみんなシャイで、奥手な人が多い。そういうところもあんまり好きじゃない。

そういうのとは反対に、関西の人はとても温かいと思う。同じ目にあってもきっと助けてくれると思う。だから大学進学で関西へ来て、すごく土地に愛着を持ったし、就職するなら関西が良いと思ってた。買い物・交通の便利さも関西がちょうどいい。

このように、地元が近畿圏外であっても、土地に愛着を持ち住み続けるという例もあった。実際Lさんも結局は大阪でのSEの内定をもらっている。

### (3) 結婚・出産後の仕事継続と企業選好要素

また、「結婚および出産後も仕事を続けたい」という者は、13名もいた。内訳は、広域型8名、地域型4名である。この4名のうち2名のFさんとOさんは、結婚・出産後もずっと働き続けるために地域型を志望したという。転職のない職種に就き、無理なく仕事と育児を両立したいと語っていた。Fさんはインタビュー冒頭から「一生働き続けるつもり」と言っていた。その真意を確かめると、それは意外な動機づけであった。

自分の母親が専業主婦で、子どもが中学高校と大きくなっていくにつれ離れていくと思うし、そうなるとき「誰かとつながってほしい」と思うから。あと、何を楽しみに生きていけばいいか、年を取ってから生きがい分らなくなりそうだから。自分は仕事をし続けて、会社の同僚など一緒に働く人との関係やつながりを築きながら、なにかあったら相談できる相手もいる状況で生きていきたいと思う。

転勤とかが多い仕事・職種やと続けていくことも大変やし、将来結婚したら仕事をやめなあかんくなる。それは嫌やから関西に居続けられる仕事を選んだし、将来結婚する人も転勤のない人がいい。また福利厚生を重視したのも、自分が無理なく仕事を続けられるようにするため。産休制度・育児休暇が充実していたり、勤務時間が長すぎないことも重視した。そうして仕事を続けながら、自分は関西に納まっていたい。

高知県出身でUターン就職予定のOさんも同じように、転勤によって結婚したあとの主婦業や育児が困難になること、それにより仕事継続が困難になることを避けるため、地域型を志望したという側面もある。また、高知にこだわった理由は、地元のお祭りや家族の存在もあるが、Oさん自身の夢がある。それは子供に、自分が通っていた母校（高校）に行ってほしいという願いである。高校時代そこで過ごしたことをとてもよかったと思っているOさんは、高知で育児をしたいし、できれば子供にも同じ学校へ通わせ、充実した学生生活を送ってほしいと思っているようだ。

## 4.3 存在論的戦略メリットを重視した地元志向

「地元就職にこだわりましたか」と尋ねたとき、近畿圏内出身者のほうが地元就職にこだわる・地域型が多かったということは明らかになった。その理由についてみると、多くは家族や友人など人とのつながりを重視した結果、つまり存在論的戦略メリットが働いた場合が多かった。その存在論的戦略が、実際どのように影響を与えたのか。インタビューでの語りを通して、明らかになった。

### (1) 近畿圏内出身者の場合

近畿圏内出身で、地元就職を希望したのは5名だったが、そのうち4名は存在論的メリットについて言及した。まず、家族について語ったCさんとDさんについて。

Cさんは大阪府交野市に在住しており、地元就職にこだわった理由を「いつか結婚したら自分を出ていかなければならないから、それまでは実家で出来るだけ多くの時間を家族と過ごしたい」と強調した。また京都府上京区在住のDさんは、地元就職にこだわった理

由について「現在母親と2人暮らしをしているが、自分が家を出ることになると、母が一人になってしまう。自分はどこへ行っても構わないと思っていたが、母のことを考えると心配だ」と言っていた。このように2人は家との関係を重視して、実際内定先も実家から通えるところへ勤務することが決まった。

またFさんは存在論的戦略を家族ではなく、とくに友人関係について言及した。

自分は関西で生まれ育ったため、知り合いが関西に多い。またその友人たちも多くは関西に残ることになっている。会いたいときにすぐ会える距離にいるのがいいなと思っていた。また社会人になって新しい環境に慣れることも大変なのに、そこで新しい人間関係をイチから築いていくことに億劫さも感じる。

たしかに、社会人1年目となると慣れるまでは疲れやすくなるかもしれない。そんな状況で頼れる人が近くにいないことは不安要素となりうる。またFさん反対に、場所の優先順位が低かった広域型のPさんは、このように言っていた。

就職活動時は、自分がどこへ行こうが構わないと思っていた。現在は彼氏もいて、家族とも仲が良いので、寂しく思う・離れたくないなと思っている。家族、彼氏、(地元・大学・バイトなどの)仲のいい友人たちは関西に残る人ばかりなので、現在必死に会社の同期と絆を深めようとしている。自分は関西にしか知り合いがないので、東京や名古屋で勤務することになると、頼るところがない。就活中はそんなこと考えてなくて、とにかく受かりたい気持ちで必死だった。

新生活がはじまり慣れない環境のなかで人間関係を築いていくことは、人によってはストレスになることも十分ありうる。近畿圏にしか友人がいない、または近畿圏に多いということは共通する二人だが、その生活や自分のストレス耐性まで見越した就活をし、地域型・広域型と分かれていた。

## (2) 近畿圏外出身者の場合

近畿圏外出身者で地元就職をしようとする学生、つまりUターン就職を希望する学生の存在論的戦略メリットについて焦点を当ててみよう。Uターン就職希望者は5名いたが、地元のみを勤務地として考えて就職活動をしたのはIさんとOさんだった。それ以外の3名Eさん、Jさん、Lさんは地元就職もひとつの選択肢として、地元企業の選考を受けていた。結局、Uターン就職することになったのは、Eさん、Iさん、Oさんの3人である。このうち存在論的メリットについて言及したのはJさん以外の4名だった。またその4名ともこだわった理由として、家族について触れている。高知県出身であるOさんは、自身の地元就職への道のりと心の変化についてこのように語ってくれた。

きっかけは遠距離恋愛をしていた恋人がいたこと。2年間交際しており、彼は高知にいて、絶対に地元を出るような人ではなかった。私が地元に戻るという選択肢がないと、2人に未来はないなと思っていた。

もちろん地元は好きだからという気持ちもある。また母子家庭で、弟は2人いるが、いずれ男の子は出ていくので、母が心配だったし、地元に戻ろうと思った。

結局Oさんは内定が出た後にこの恋人と別れることになってしまったが、地元就職になったことについては前向きであり、「恋人のことはただのきっかけ。家族や地元への愛着で戻りたいという気持ちが大きい」と語っていた。このOさんだけではないが、恋人との関係が地元就職に影響するという例もいくつかあった。また恋人がいるタイミングが就職活動期と重なっていたら、場所へのこだわりが変化していたかもしれない、と言及する者も数多くいた。

また東京出身のIさんは、大学進学を機に京都での一人暮らしを始めた。しかし以前から家族に「家に帰ってきてほしい」「帰ってくるのを楽しみにしている」など言われていた。自分自身も「家族と過ごす時間をできるだけ長くしたい」という希望もあったようだった。また4年間一人暮らしをしてみて、一人で生活することの寂しさも身に染み、一人暮らしは向いていない、誰かと一緒に暮らしたいとも思ったそう。もちろん地元への愛着や経済的不安もあっての地元就職志向だった。この経済論戦略については後の項で記述する。

つぎに広域型でありながら地元就職を視野に入れ、就職活動を行ったEさん、Lさんへのインタビュー結果だが、この二人に共通することは「家族の体調不良」だった。

就職活動を始めた当初は、地元に戻るつもりは全くなく、都会で働きたいと強く思っていたEさん。しかし、就職活動中に祖父が体長を崩し入院などもしていた。そのことがきっかけで、祖父を心配し実家へ頻りに帰るようになっていた。そのとき、自分と地元について考えるようになったそう。それまでEさんは地元に戻る度に田舎っぽさを感じており、「すごく嫌だった」と言っていたが、その考えは変わった。地元の「方言」や「人とのつながり」を再認識し、結果的に「やはり地元が好きだ」と好意的に思うようになった。また地元就職が決まったことも偶然で、母親に勧められた損害保険会社を受験してみると、あっという間に選考が進み、内定が出た。都会への憧れ・広い世界や視野を持って働きたいと思って広域型として就職活動をしていたEさんにとって、予期せぬUターン就職に葛藤した。また母親もEさんと同じ考えで「広い世界で働きなさい」という考えを持った人だった。母からも地元へ帰ってくることは反対されたが、最終的に「地元においても、自分が自分の可能性を狭めないように、どんどん動いていけばいいんだ」と思うようになり、地元就職を決心した。また反対していた母も納得したようだった。

また鳥取県出身のLさんもまたきっかけは「祖父の体調不良」だった。その時初めて「家族になにかあったときに、すぐに駆け付けられる距離に居たい、家族の傍にいたい」と思ったそう。しかし地方圏の雇用情勢の厳しさについての問題があった。「地元には本当に仕事がない（求人数が少ない）ので、地元就職だけに絞ることは出来なかった。地元では地銀や公務員、小規模の会社を見ていた。また家族のためだけに地元に戻ってしまうのは、自分は納得できるのか・満足出来るのかということも考えていた。」と彼女は言った。結局、やりたい仕事内容で、電車などを使って少し時間はかかるが、すぐ帰れる距離という大阪で内定をもらった。また「万が一家族になにかあったら、今の仕事の資格だけ取って地元に戻ってSEをするか、地元で公務員になることも視野に入れている」とも話していた。

広域型だった彼女たちも、「家族」をきっかけに地元就職を考えた。結果的に地元へUターン就職になったのはEさん、Iさん、Oさんの3人であるが、ここでも存在論的戦略、とくに家族の存在や影響の大きさをみる事が出来る。

### (3) 出生順と存在論的戦略

地元就職志向において家族のことについて触れたのは、8名中6名だったが、その8名中4名が「長子」または「親から頼られる存在」であった。またその4名は、就職活動中や活動前に親との会話で「地元に残ってほしい／戻ってきてほしい」など言われたことはないそうだ。また地元に残って・戻ってきてほしいんだろうなど感じることはあっても、直接口で言われたり、強いられることはなかったと4名ともに言っていた。

これはやはり、富江（1997）による、高校生の進路選択における出生順位が地元志向を規定するという研究や、佐藤（2005）による、東北にある保健福祉大学の学生を対象にした長男・長女であれば地元就職志向が強くなるという関連が支持できるということであろうか。いずれにしても出生順と地元志向については無視できない関連である。

### (4) 存在論的戦略がマイナスに働く事例

ここからは、存在論的戦略がマイナスに働くことにより、地元就職志向にならなかった対象者についての事例を紹介しよう。

まず香川県出身のBさんは3回生1月から就職活動を始めた。彼女は教職課程を履修しており、中学校・高等学校の社会科教諭、またダブルスクールをして、小学校教諭の教職員免許取得を目指していた。以前から「教員になるなら、一度社会人として民間企業で働いて経験を積んでから教師になりたい」と言っていた彼女は、その希望通り、民間企業への就職を目指していた。しかし思った以上に就活は難航、また考え直して一時は就職活動を辞め、教員一本で考えるようになった。しかし教員採用試験などが始まるとやはり違和感を覚え、民間企業就職を目指し、4回生8月頃から再び就職活動を始めた。彼女就職活動においては「敢えて地元就職をしない」という選択をしていた。

家族の「近くに居すぎることに対する不安」もある。家族と一緒にいることで、リラックス・安心感では満たされるが、自分自身が持つ好奇心や挑戦したい気持ちが抑えきれなくなり、羨望に変わったとき、割り切れない自分もつらくなるし、周りを傷つけてしまうのではないかと不安になるから。大事な人だからこそ傷つけない。

家族は自分に対して優しいし、何があっても受け入れてくれるとわかっている。だからこそそこに自分が甘えないために、あえて距離を作り、離れた地で頑張って、ときどき疲れを癒すための場として地元・家族を捉えている。安定した精神状態を自分で保てるようにし、そこで頑張りながら、大切なひと（家族）を大切に思える人でいたい。

また近くにいることで、自分は母親からの影響を強く受けすぎてしまうこともある。母親のことは好きだし、尊敬もしているが、反発したくなる。母親が考えることについて受け入れることはできるが、100%従うことはしたくないと思っている。自分は常識や通念に囚われたくない。

自分がここまで“好奇心”“挑戦”と言い続けるのは、自分の“若さ” 故なのかなとも思っている。新天地に行きたいという思いも冷静に考えれば自分にとって（メンタル的にも）不利なこととわかっている

さらに彼女はこうも述べている。

初めて社会人としての働き始めは、腰を据えられる環境がいいかなと思うこともあった。そう考えると、慣れた土地で、母親が近くにいたほうが、家事などの楽さやストレスの発散になると思った。今も一人暮らしをしているが、やはり実家のほうが負担は少ないと思うから

と実家の機能については評価しているにも関わらず、敢えてその機能に甘えたくないという選択をした。自分の成長のために、敢えて厳しい道を選ぶという決断をしている。

また Kさんは、兵庫県宝塚市出身だが、地元就職志向はさほど強くはなかった。関西圏内に就職はしたいが、実家には帰りたくないと言っていた。彼女は現在京都市内で下宿していて、もう一人暮らしを初めて3年目だそうだ。実家から大学へは通える距離ではあるが、学生時代の多くを一人暮らしで過ごした彼女は、“一人暮らしの気楽さ”を手放したくないという。昼夜逆転気味になったことで、たまに実家に帰って遅くまで起きていると、寝る時間にまで干渉され、自由を奪われると感じたそうだ。彼女は「マイペースに生きたいし、私にとって実家には制約しかない」とハッキリと言っていた。内定が決まって結果的に勤務地は実家から通えるところという条件なので、最初の1年目は実家に住もうと思っているが、「2年目以降はまた一人暮らしをしようと思っている」と言っていた彼女からは強い意志を感じた。

このように、家族や実家の存在がマイナスに働き、地元就職志向でなくさせることもある。

### 3.4 経済的戦略メリットを重視した地元志向

就職活動中に地元就職にこだわったかはどうであれ、結果的に地元就職になった者は16名中8名であった。そのなかで「就職してからも生活するうえで親に頼ると思いませんか」という質問をした。

表9：就職してからも生活するうえで親に頼るか

	地元就職者	地元外就職者	計
はい	6	0	6
いいえ	2	8	10

表9の結果で、親からなんらかのサポートを受けるだろうと回答した6名の地元就職者は、就職してから実家で暮らしながら勤務する予定であり、家事や食事などの実家の役割について期待している。なかには実家に住むことにより生活費を削減した分を貯金して、後々一人暮らししようと思っている者もいるようだ。また6名中3名は一人暮らしの経験

はない。特にCさんは一人暮らしについて不安であるということも言っていた。彼女は就職したら実家から通勤する予定ではあるが、仕事が忙しくなり通勤が困難になれば一人暮らしの可能性もあると示唆している。「とりあえず社会人1年目は大変だろうから、実家に頼る」という意見も数人から聞いた。

また近畿圏外出身でUターン就職予定のIさんは最初から経済的不安について語っていた。

勤務先予定の会社は給与がさほど高くないと聞いている。経済的な問題で、最初から一人でやって行ける自信がなかったから。社会人になったら一人で生きなきゃと思う半面、現実的には無理かなと思ってて。就職したら会社の寮に入ろうかなと思ってたけど、家族が家に帰ってきてほしいと言っているし、甘えようかなと思う。

家族は父・母・姉と実家に住んでいるが、みんな現役として働いているので、自分が家族の分まで頑張る稼がなきゃ、と思わなくていいという安心感も少しある。

彼女は給与やお金というシビアな現実を目を向けつつ、実家に頼ることは自分の考えは甘いかもしれないとも語っていた。しかし家族と出来るだけ長く一緒に過ごしたいなど、彼女の意向と家族の意向も一致している、また内定先では幼いときからずっと続けていた卓球ができるということでUターン就職にも比較的前向きであった。

また表9の結果で「いいえ」と答えた2名はどちらもUターン就職するものであり、どちらも就職後の親との関わり方を明確に話した。たとえば静岡県に勤務することになっているEさんは、地元就職はするが実家には住まず、友人とルームシェアをする予定だと言っていた。週末実家に帰って両親や家族に会ったり、一緒に食事したりしようと思っているが、基本的には親に頼らず自分で生活していくつもりと言っていた。また高知県での勤務が決まっているOさんは実家に住むが「家事などはしっかり分担するつもりだ」とははっきりと言っていた。これら2名は学生時代に親元を離れ、一人暮らしをした経験があるからかもしれないが、はっきりと結果が分かれた。

### 3.5 地元就職志向と〈就活力〉

〈就活力〉とは、なにか。平尾・重松（2006）によると、就職に関する行動および意識の力などを総称して〈就活力〉と呼ぶとしている。実際に対象者には、就職活動での行動についてでは、具体的には説明会やセミナーにどれくらい行ったか、OB訪問をしたか、また意識の面でやりたい仕事があったかなどを訊ね、対象者の就活力を測った。

結果、対象者全体の就職活動に対する行動について、ほぼ全員が説明会やセミナーに参加し、ピーク時には1日2~3社、ほぼ毎日という行動を取っていた。またやりたい仕事があったかという問いに対しては表10の結果になった。

表10：やりたい仕事のイメージがありましたか

	地域型	広域型	計
あった	3	3	6
なかった	5	5	10



これは地域型・広域型に関係なく、多くの人はやりたい仕事に対するイメージはなかったが、行動しながらイメージを掴んでいったという傾向にあった。また、OB 訪問について質問した結果が表 11 である。

表 11 : OB 訪問をしましたか

	地域型	広域型	計
した	4	5	9
しなかった	3	4	7

この結果だけみると、全体で OB 訪問した人のほうが多く、広域型のほうがより積極的であるように見える。しかし一人当たりの OB 訪問した人数をみると、広域型は約 2 人であるのに対し、地域型は約 4 人である。

また OB 訪問や企業研究だけでなく就職活動団体に所属している学生も広域型・地域型各 1 名ずつで 2 名居た。主に模擬面接や団体を運営する相談役のアドバイス受けたり、OB を呼んで話を聞いたりしていたそう。このことから、平尾・重松 (2006) が地方圏国立大学である山口大学の学生を対象にして行った調査で明らかにした、地元志向の強い学生は総じて就活力が弱いという見解とは異なる結果となった。

## 4 考察

### 4.1 マッチングについて

まず企業選択の時に重要視する要因についてだが、今回は「マッチング」「場所」「内容」「福利厚生」の順に重要視されていた。これまでの先行研究では若者の場所へのこだわり、つまり地元志向の強さが強くなってきているということを指摘されており、実際加藤 (2010) の調査においても企業選好要因は「場所」「規模」「金銭的要因」「福利厚生」の順だった。しかし、今回の調査では「場所」が地元であるというこだわりよりも「マッチング」について重視する人が多かった。

なぜマッチングを重視する者がこれほど多いのか。この理由について、筆者はいくつかの推測をした。まずリストラ不安について。不況の煽りを受け、再び雇用情勢が厳しくなったときに企業内でリストラを受けないため、最初から自分に合う企業・能力を十分発揮できるところに就職し、そこで十分に自分の力を活躍していればきっとリストラ候補から外れられるだろう。そのためにマッチングを重視したのではないか。また「マッチング」とは極めて感覚的な要素である。自分にぴったり合うという相性を重視するのは、これまでの詰め込み教育からゆとり教育への転換期を経験し、個性を伸長することを教えられた世代だからこそかもしれない。無理をしないというスタンスが私たちゆとり世代には強い気がする。よってマッチングをより重視したのではないかと考える。

## 4.2 経済的・存在論的戦略

また地元志向の若者像を表す経済的・存在論的戦略2つの軸の影響だが、都市部の大学に通う学生が就職地を選択するとき、同じようにこの2軸が働いていることがわかった。さらに、そのなかでも存在論的戦略について言及する人が多く、轡田（2009）の結果と同じく、存在論的戦略の強さが地元志向の中心核をなしていることも明らかになった。世界同時不況など激変した経済状況や時代の影響を受け、多くの若者は経済的戦略メリットを求めて地元志向になるか思ったが、結果は2008年以前と変わらないということがわかった。轡田の示した類型に、今回インタビューした全員を当てはめることは出来なかった。以下、その結果である。

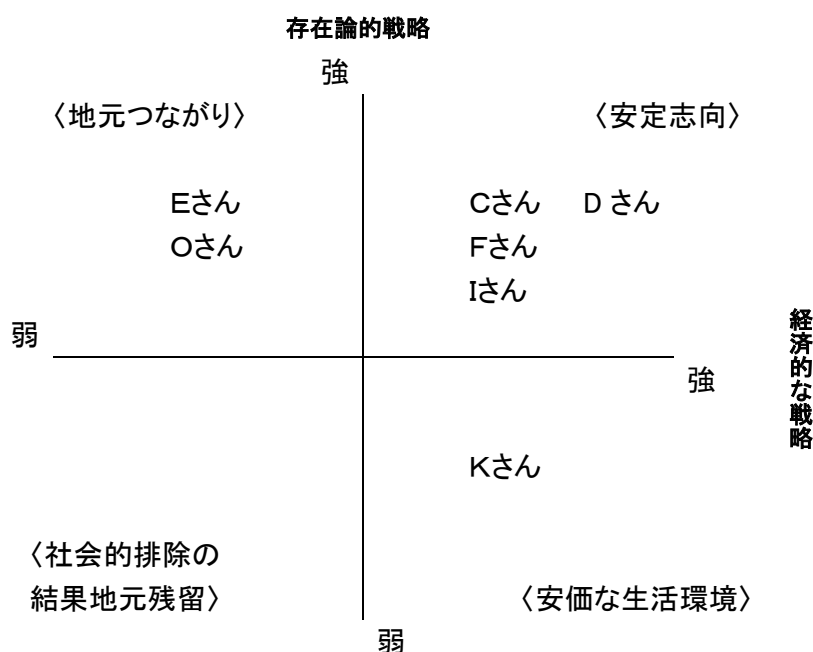


図2：地元志向の若者像の類型

轡田（2009）をもとに作成

なぜ「社会的排除の結果地元残留」にあてはまる者がいなかったか。例えば先行研究で言われていた例は、「自らの雇用不安定に加え、健康問題等の理由で、親世代の機能不全の危機が生じたとき、初めて実家は自分の存在価値をかりうじて与える空間になる」や「労働環境の悪化などを理由にやりがいを放棄して、実家に帰る」などだった。まず前者のような親世代の機能不全の危機のために実家に帰るような者はおらず、全員が何かしらポジティブな理由を持って地元就職志向になっていた。また今回インタビューした者の中には、今後何年か仕事を継続しているうちに、やりがいにこだわったことにより労働環境が悪くなり、仕事を続けられなくなって実家・地元に戻るといった状況になる者もいるかもしれない。事実、その可能性を口にした者もいた。よって、彼女たちは予備軍と位置付けられるが現時点では地元就職の予定はないので、この類型には分類しかねる。

また、なぜ全員があてはまらなかったか。あてはまらなかったのはそもそも地元就職志向ではなかった者たちであり、轡田（2009）によってつくられたのは、地元就職志向の若者像を対象として作られた類型だからである。よって、広域型就職活動生を同じように分類はできない。しかし地元就職志向でない広域型就職活動を行う若者像の類型もきっと出来るはずである。残念ながら筆者の調査結果ではその類型作りまでは及ばなかったが、その軸の一つには〈やりたいこと〉への憧れ有無で軸を作れるのではないかと思う。なぜなら対象者の何人かには「やりたいことが出来るなら場所はどこへ行っても構わない」という意見がいくつかあったからだ。

### 4.3 就活力

就職活動行動や意欲においては、出身圏や就職活動の地域へのこだわり有無などどの属性でも就活力が強く、もはや地元志向だからといって就活力が弱いなどという傾向はなかった。どの学生も「就職氷河期」を生きているという自覚があり、中には就活団体に属し、周りとの差をつけるための積極的行動がみられた。

また、大学が都市部にあり学生時代を都市部で過したことにより、就職してから大都市へ出ることに抵抗が少ないかと思っていたが、結果としては逆にこれ以上の都会は望まない、今のままで十分という意見が多かった。大半の対象者は地元への不満を口にしてしたが、むしろそれ以上に大都市に対してネガティブな意見を持つものが多く、都市部で暮らしていても、大都市へ進出することへの抵抗に関連はないという傾向がわかった。

### 4.4 総括

これらの結果から、都市部にある大学に通う現代の女子大学生は、地元就職志向はあるが強すぎるということはなく、むしろ企業選好時に場所よりもマッチングを重視しているということがわかった。また地元就職を希望する者は、存在論的・経済的戦略は働き、特に家族との関係を重視した存在論的戦略の影響が大きい。さらに広域型の就職活動を行った学生と比べても、地域型の就職活動を行った学生の就活力は非常に高く、都市部にある大学に通っている地元就職志向が強い学生は就活力が弱いとはいえないということがわかった。

## おわりに

本稿の目的は「大学の所在地によって、就職地選択に影響があるか」ということだった。都市部にある大学に通う学生が、就職活動時に地元就職を選択する場合においても、経済的・存在論的戦略の影響を受けることがわかった。これは大学の所在地が都市部であろうが地方圏であろうが、地元就職志向は確認でき、その要因に家族との関係や存在が強く関連していた。また、現代の大学生が企業を選ぶとき「場所」よりも「マッチング」を重視するというのは、新しい発見であった。

しかし今回調査対象にしたのは都市部にある大学に通う女子学生のみだったので、都市部にある男子学生を対象に調査できれば、また違った傾向が出てくるかもしれない。今後さらなる調査が行われることを願いたい。

[注]

- 1) 月例経済報告とは景気に関する政府の公式見解を示す報告書で、内閣府が景気動向指数に基づき月次で取りまとめている。冒頭で経済全般について総括的に評価し、個人消費・設備投資・住宅建設・公共投資・輸出入・貿易・サービス収支・企業利益・雇用など個別要素の動向についても言及。今回この月例経済報告を用いたのは、経済と雇用について対象年毎に各項目のデータがあっていたこと、さらに大学生就職内定率を見る時10月1日現在のデータを参照したので、それに合わせるためである。
- 2) 有効求人倍率とは厚生労働省が毎月末にその前月分を発表する。職を求める人1人当たりの求人数の割合を示しており、この倍率が高いと職を求める人が職を見つけやすく、低いと見つけにくいので景気の状態を示している。
- 3) 大卒求人倍率とは、民間企業への就職を希望する学生1人に対する、企業の求人状況を算出したものである。[大卒求人倍率の定義]  $\text{求人倍率} = \text{総求人数} \div \text{民間企業就職希望者数}$
- 4) Aさんは出生地は千葉県船橋市であるが、その後父親の転勤に伴い幼稚園入園時に京都府へ転居、その後京都府内の小学校へ入学したが、父親の仕事の関係で、小学2年生からインドネシアへ転居。中学入学時には日本へ戻り、京都府内の私立中学校へ入学し、現在の住居に住んでいる。本人が就職活動において、地元は京都と言っていたこと、また今後日本で生きていくと考えると京都が地元になると言っていたため、分類を「近畿圏内出身」とした。

[文献]

- 平尾元彦・重松政徳, 2006, 「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』2006.3(3):161-168.
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編, 2005, 『社会学小辞典〔新版増補版〕』有斐閣
- 加藤里美, 2010, 「大学生の企業選好と価値観 ——コンジョイント分析を用いた探索的研究」『日本経営診断学会論集』9:72-78.
- 響田竜蔵, 2009, 「地元志向と社会的包摂／排除 ——地方私立 X 大学出身者を対象とする比較事例研究」樋口明彦『論文集(Ⅲ) 若者問題の比較分析』法政大学社会学部科研費プロジェクト, 151-170.
- 李永俊・石黒格, 2008, 『青森で生きる若者たち』弘前大学出版会.
- 松村明編, 1995, 『大辞林〔第二版〕』三省堂
- 岡本眞一, 『コンジョイント分析——SPSSによるマーケティング・リサーチ』ナカニシヤ出版.
- 新谷周平, 2007, 「ストリートダンスと地元つながり」本田由紀編『若者の労働と生活世界』大月書店.
- 佐藤隆三, 2005, 「保健福祉学科学生に意識と傾向 ——アンケートでみた特性——」, 『日本保健福祉学会誌』, 2005(4):125-129.
- 富江英俊, 1997, 「高校生の進路選択における「地元志向」の分析 ——都市イメージ・少子化との関連を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 第37号.

[参考 URL]

内閣府, 2005, 「月例経済報告(平成17年10月)」(2011年12月15日取得, <http://www>

- 5.cao.go.jp/keizai3/2005/1012getsurei/main.html
- , 2008, 「月例経済報告(平成20年10月)」(2011年12月15日取得, <http://www.5.cao.go.jp/keizai3/2008/1020getsurei/main.pdf>)
- , 2011, 「月例経済報告(平成23年10月)」(2011年12月15日取得, <http://www5.cao.go.jp/keizai3/2011/1017getsurei/main.pdf>)
- 文部科学省および厚生労働省, 2005, 「平成17年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査(平成17年10月1日現在)」(2011年12月15日取得, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2005/11/h1110-2.html>)
- , 2008, 「平成20年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査(平成20年10月1日現在)」(2011年12月15日取得, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/12/h1216-1.html>)
- , 2011, 「平成23年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査(10月1日現在)」(2011年12月15日取得, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/11/1313317.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/11/1313317.htm))
- リクルートワークス研究所, 2008, 「大卒求人倍率調査(2009卒)」(2011年12月15日取得, [http://www.works-i.com/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=355&item\\_no=1&page\\_id=17&block\\_id=302](http://www.works-i.com/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=355&item_no=1&page_id=17&block_id=302))
- , 2011, 「大卒求人率調査(2012卒)」(2011年12月15日取得, [http://www.works-i.com/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=834&item\\_no=1&page\\_id=17&block\\_id=302](http://www.works-i.com/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=834&item_no=1&page_id=17&block_id=302))